

① 申請者	行田市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D <input checked="" type="checkbox"/> E	
③ タイトル				
和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田 <small>ぎょうだ</small>				
④ ストーリーの概要（200字程度）				
<p><small>おしじょう</small>忍城の城下町行田の裏通りを歩くと、時折ミシンの音が響き、土蔵、石蔵、モルタル蔵など多彩な足袋の倉庫「足袋蔵」が姿を現す。行田足袋の始まりは約300年前。武士の妻たちの内職であった行田足袋は、やがて名産品として広く知れ渡り、最盛期には全国の約8割の足袋を生産するまでに発展した。それと共に明治時代後半から足袋蔵が次々と建てられていった。今も日本一の足袋産地として和装文化の足元を支え続ける行田には、多くの足袋蔵等歴史的建築物が残り、趣きある景観を形づくっている。</p>				
  				
  				
⑤ 担当者連絡先				
担当者氏名	行田市教育委員会文化財保護課 中島 洋一			
電 話	048-553-3581	FAX	048-556-0770	
E-mail	bunka@city.gyoda.lg.jp			
住 所	埼玉県行田市本丸2-20			

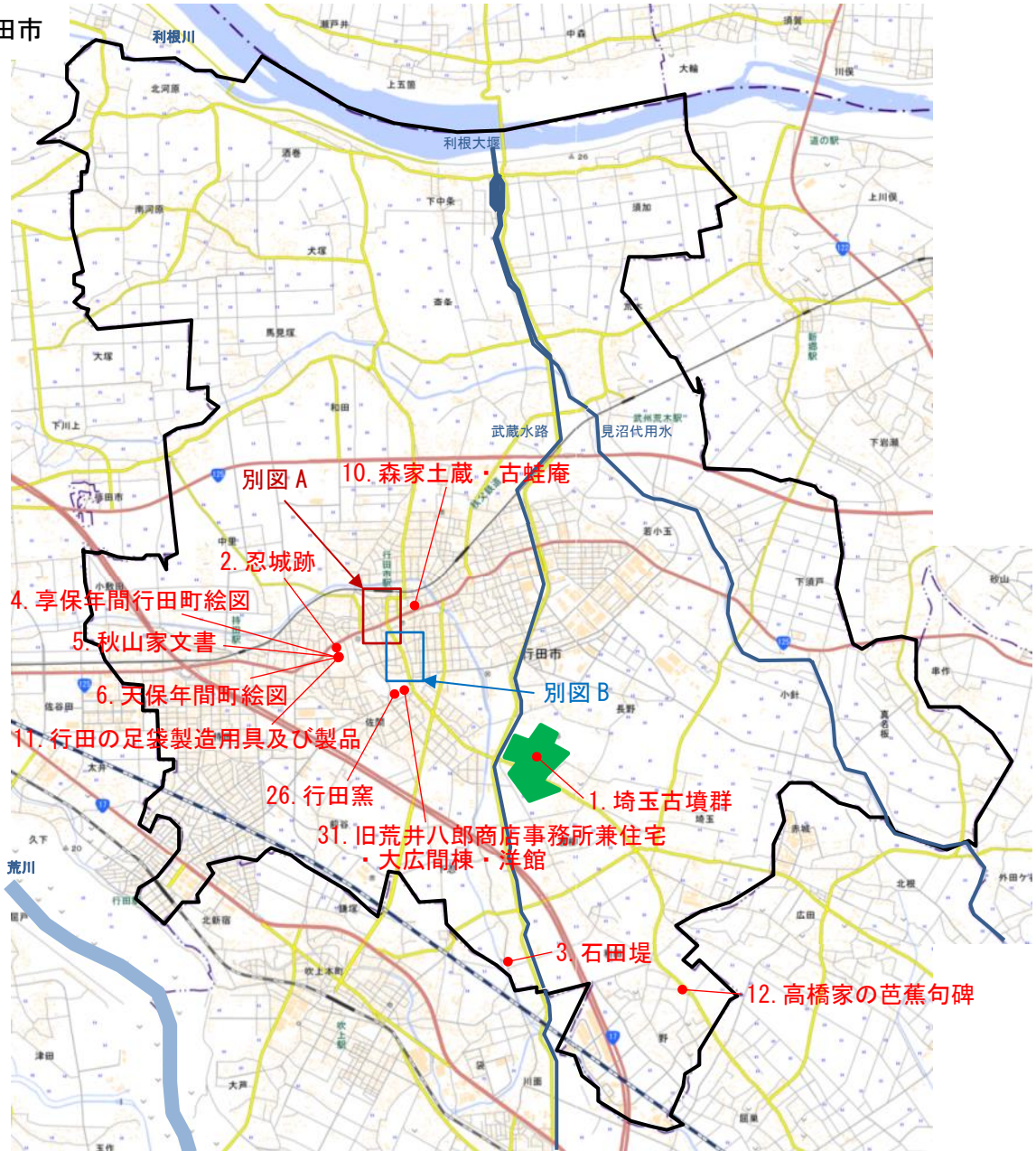
市町村の位置図 (地図等)

埼玉県



構成文化財の位置図 (地図等)

行田市



※この地図は国土地理院地図を加工して使用

構成文化財の位置図 (地図等)

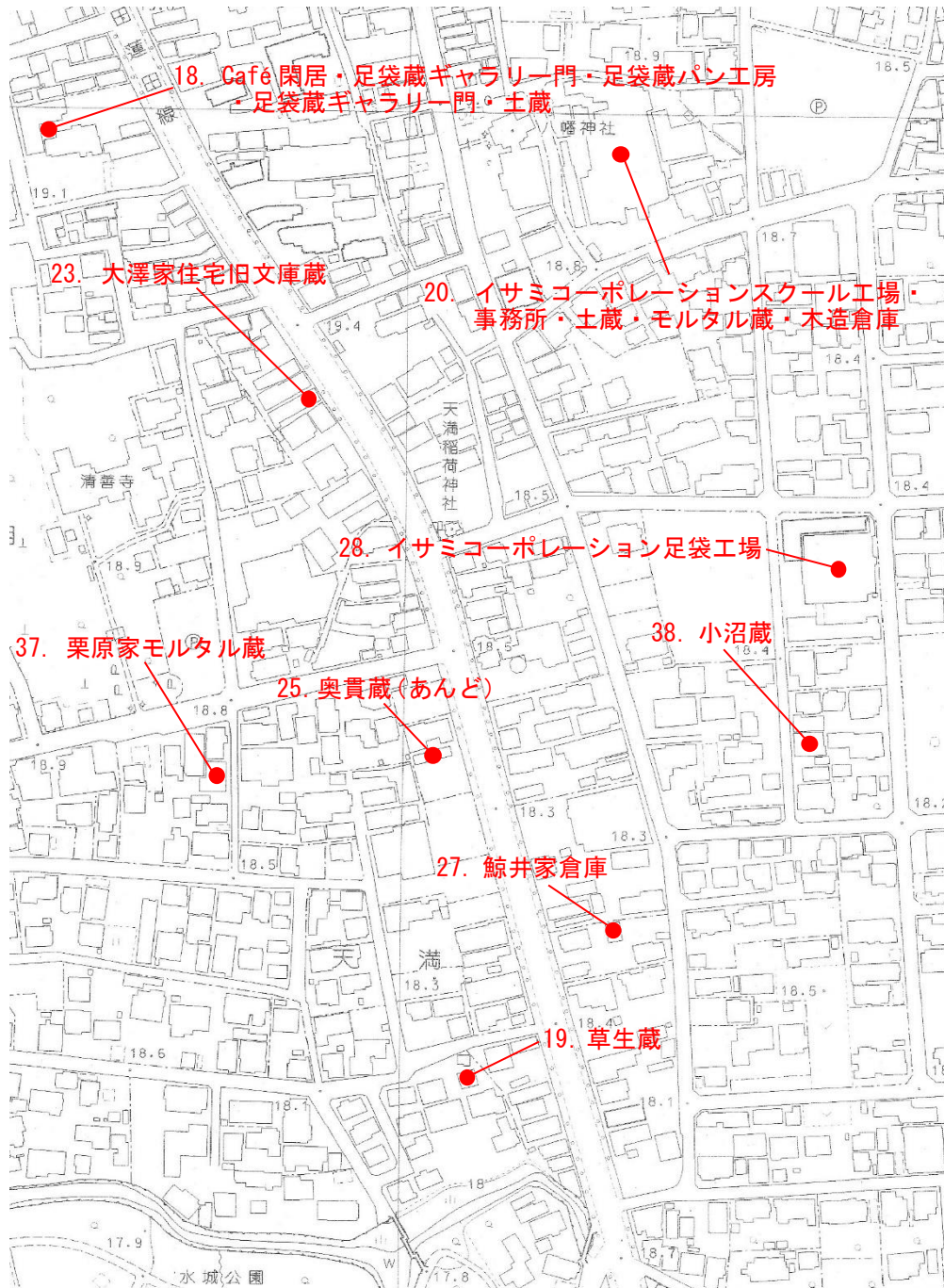
別図 A



※この地図は行田市都市計画図を使用

構成文化財の位置図 (地図等)

別図B



※この地図は行田市都市計画図を使用

ストーリー

関東平野の中央部に位置する行田市は、日本一の足袋生産地として知られ、足袋産業全盛期を偲ばせる足袋の倉庫「足袋蔵」が今も数多く残る“足袋蔵のまち”です。表通りに土蔵造りの見世蔵が建ち並ぶ“蔵のまち”は各地にあります。行田はそうした“蔵のまち”とは異なり、足袋蔵のほとんどが裏通りに建てられています。蔵の造りも土蔵造りだけでなく、石造、煉瓦造、モルタル造、鉄筋コンクリート造、木造と多彩です。いつどのようにして「足袋蔵の町並み」が形成されたのでしょうか。

足袋づくりの始まり

利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。

行田足袋については、「貞享年間亀屋某なる者専門に営業を創めたのに起こり」との伝承があり、享保年間(1716~1735)頃の「行田町絵図」に3軒の足袋屋が記されていることから、18世紀前半には生産が始まっていたと思われます。享保年間に忍藩主が藩士の婦女子に足袋づくりを奨励したとの伝説があるように、その後足袋づくりは盛んになり、明和2年(1765)の「東海木曾両道中懐宝図鑑」に「忍のさし足袋名産なり」と記されるまでに、広く知られるようになりました。足袋には株仲間がなく、取引が比較的自由に行えたことから、足袋づくりは益々盛んになり、天保年間(1830~1844)頃には27軒もの足袋屋が、行田のまちに軒を連ねるようになりました。



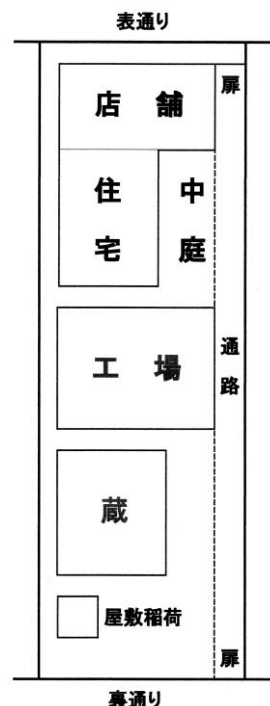
さし足袋(刺し子の足袋)

足袋産業の発展と足袋蔵の建設

近代に入ると足袋は大衆化して需要が拡大し、行田の足袋商人は東北地方や北海道に直接赴いてさらに販路を広げると共に、軍需用の足袋の生産にも携わり、他の産地を圧倒してゆきます。足袋づくりには作業工程ごとに専用の特種マシンが導入され、日露戦争の好景気を契機に足袋工場建設ブームが起こって、敷地の裏庭に工場が建てられてゆきます。生産量が増えると、出荷が本格化する秋口まで製品を保管して置く倉庫として足袋蔵が必要になり、既存の土蔵の転用と共に、敷地の一番奥に足袋蔵が数多く建てられるようになりました。

石田三成の水攻めに耐えた忍城の城下町であった行田は、近世前半に城と城下町の整備が行われ、間口の広さに応じて各家に税が課せられたので、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地が通り沿いに並ぶ町割りが形成されました。近世の行田は、鴻巣・吹上から館林へと続く館林道・日光脇往還の宿場でもあったので、馬の世話を行なう裏庭とそこに通じる路地が家々の間に設けられていましたが、近代になって馬の世話の必要がなくなり、遊休化した裏庭に足袋工場と足袋蔵が建てられていったのです。

こうして短冊形の敷地に、北風に備えて北西方向のみを塗り壁にしたり、北西方向の窓を極端に少なくしたりと言った防火・防寒対策を施した店舗・住宅、接客用の中庭、工場、足袋蔵、火除けを願う屋敷稲荷が表から列状に並ぶ、足袋商店特有の建物配置が形作られました。



足袋商店の建物配置



洋風建築技術が導入された大型の土蔵



戦後の石蔵

行田の足袋蔵は、遅くとも江戸時代後期頃には建てられ始めていたようで、弘化3年(1846)の大火の際に足袋蔵が延焼を食い止めています。足袋蔵は商品や原料を扱いやすいよう壁面に多くの柱を建てて中央の柱を少なくし、床を高くして床下の通気性を高めるなど、内部の造りに特徴があります。足袋蔵の建設が本格化する明治30年代頃までは、純和風の土蔵が建てられていましたが、明治時代末頃からは土蔵の小屋組みに洋風建築技術が導入され、土蔵だけでなく石蔵も建てられるようになりました。大正時代に入ると大型の足袋蔵も建てられるようになり、大正時代末には鉄骨煉瓦造の足袋蔵が現われました。昭和に入ると鉄筋コンクリート造、モルタル造、木造の足袋蔵も現われ、大小様々な多種多様の足袋蔵が昭和戦前期には建てられました。戦後は木材不足から石蔵が主流となり、昭和30年代前半まで足袋蔵の建設は続けられました。

行田の足袋蔵が他の“蔵のまち”と違って多種多様であるのは、このように100年以上もの永きに渡って、新しい建築様式を取り入れながら足袋蔵が建てられ続けたからなのです。そしてその背景には、生産量が増加しても企業統合等による大企業化には進まず、逆にのれん分けして次第に足袋商店と足袋蔵が増加、ピーク時には200社以上の中・小規模の足袋商店が共存して一大産地を形成していた、行田の足袋産業ならではの特色があったのです。

日本一の足袋のまち

東北・北海道に販路を伸ばした行田の足袋商店は、「力弥足袋商店」なら八戸、「道風足袋商店」なら尾去沢鉾山といったように、問屋を通さずに各々が地域単位で独占的な販売網を築き、協調しながら販路をやがて全国そして海外へと広げて行きました。この頃の行田の人々は、老若男女を問わず皆が寝食を惜しんで工場や家庭で足袋づくりに励み、まち全体にミシンの音が響き渡っていました。寸暇を惜しんで働く女工さんの間で、手軽に食べられるおやつとしてお好み焼きに似た「フライ」、おからのコロッケとも言える「ゼリーフライ」が流行し、地域の食文化として定着しました。

また、販売先への手土産として奈良漬が好まれ、行田の名物となりました。

こうして最盛期の昭和13～14年には、全国の約8割の足袋を生産する日本一の産地となり、『行田音頭』の歌詞に「足袋の行田を思い出す」とあるように、「足袋の行田か行田の足袋か」と謳われる“日本一の足袋のまち”になったのです。



ゼリーフライ(左)とフライ(右)

継承され発展する足袋蔵のまち

靴下が普及した現在も、行田では足袋の生産が続けられており、日本一の産地として新製品を国内外へと発信し続け、「足袋と言えば行田」と多くの方に親しまれています。

足袋産業で繁栄していたことを象徴する多種多様な足袋蔵も約80棟が現存し、時折流れるミシンの音と共に、裏通りに趣きのある足袋蔵のまち並みを形成しています。そしてその再活用が、まちに新たな彩りを加え始めています。

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
1	ききたまこふんぐん 埼玉古墳群	国史跡	東日本最大規模の古墳群。忍城水攻めの際には、石田三成率いる豊臣秀吉軍の本陣が丸墓山古墳墳頂に置かれた。	
2	おしじょうあと 忍城跡	県旧跡 *旧跡は史跡に準ずるもの	城下町行田の発展の基礎となった城。沼地と河川を巧みに利用して築かれ、石田三成の水攻めにも耐え「浮城」、「水城」とも呼ばれた。現在、本丸跡には行田市郷土博物館が開設され、足袋関連資料も展示されている。	
3	いしだづつみ 石田堤	県史跡	石田三成率いる豊臣秀吉軍が忍城を水攻めするために自然堤防上に築いた堤。	
4	きょうほうねんかんぎょうだまち え ず 享保年間行田町絵図	未指定	享保年間(1716~1735)頃の行田町の絵図。3軒の足袋屋が記載されており、この時期に既に行田で足袋づくりが始まっていたことが伺える。	
5	あきやまけもんじよ 秋山家文書	未指定	行田町有数の老舗足袋商であった秋山家に伝来した文書群。江戸時代後期の足袋製造や経営を知るうえで貴重な資料である。	
6	てんほうねんかんぎょうだまち え ず 天保年間行田町絵図	未指定	天保年間(1830~1844)頃の行田町の絵図。27軒の足袋屋が記載されており、当時の行田町で足袋屋が他のどの業種よりも件数が多くなっている状況がわかる絵図である。	
7	おおさわきゆうう えもんけじゆうたく 大澤久右衛門家住宅・ どぞう 土蔵	未指定	江戸時代の行田町最大の豪商であった藍染の綿布問屋の江戸時代後期建設と思われる住宅と土蔵。土蔵は現存する最古の足袋蔵で、弘化3年(1846)の大火の際には、この2棟が延焼を食い止めた。	
8	はつうままつ 初午祭り	未指定	弘化3年(1846)の大火を契機に行田町周辺で始まった火除けの祭礼。足袋蔵の脇にある屋敷稲荷で執り行われており、足袋蔵と共に行田の裏通りの景観を形づくる風物誌となっている。	
9	いまづいんきつじよみせぐら しゅや 今津印刷所店蔵・主屋・ どぞう 土蔵	市指定建造物	足袋のラベル(ペーパー)の印刷に携わった老舗印刷屋の江戸時代後期建設と思われる店蔵・主屋、明治時代建設と思われる土蔵。明治・大正期の当主今津徳之助は、忍町商工会会頭として足袋産業の発展にも大変尽力した。	
10	もりけどぞう こああん 森家土蔵・古蛙庵	未指定	嘉永3年(1850)と明治45年(1912)棟上の2棟の土蔵造りの足袋蔵。前者は既存の土蔵を明治時代に足袋蔵に転用したもので、現在は私的な民芸館「古蛙庵」として活用されている。	

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
1 1	ぎょうだ たびせいぞうようぐおよ 行田の足袋製造用具及び せいひん 製品	国登録有形民 俗	行田市郷土博物館所蔵の行田足袋の製造が手縫いから機械化へ変化していく変遷を示す貴重な資料 4971 点。	
1 2	たかはしけ ぼしょうく ひ 高橋家の芭蕉句碑	市史跡	「名月の花かと見えて綿ばたけ」の句を刻んだ芭蕉句碑。碑が建立された明治 9 年(1866)頃には、この地域で足袋の布地の原料となる綿の生産が盛んであったことがわかる。	
1 3	じゅうまんごく さや ぎょうだほん 十万石ふくさや行田本 てんでんぼ 店店舗	国登録建造物	明治 16 年(1883)棟上の元山田呉服店の重厚かつ豪勢な店蔵。後に足袋蔵に転用され、現在は埼玉県を代表する和菓子店の店舗となっている。	
1 4	まきのほんてんみせぐら しゅや ど 牧野本店店蔵・主屋・土 ぞう たび とくらしの はくぶつ 蔵・足袋とくらしの博物 かん 館	未指定	大正 13 年(1924)棟上の豪勢な店蔵・主屋、明治 32 年(1899)棟上と建築年代不明の 2 棟の土蔵造りの足袋蔵、大正 11 年(1922)棟上の足袋工場が残る元足袋商店の建物群、現在工場はNPO運営の博物館となっている。全盛期の足袋商店の様相を現す建物群である。	
1 5	ときたけじゅうたく ・ときたぐら 時田家住宅・時田蔵	未指定	元時田啓左衛門商店の昭和 15～16 年頃建設の和洋折衷住宅、明治 36 年(1903)竣工と大正初期頃建設の 2 棟の土蔵造りの足袋蔵。足袋蔵は、行田市市内では珍しい袖蔵形式である。	
1 6	ほずみぐら 保泉蔵	未指定	元行田随一の足袋原料商店の昭和元年(1926)建設の石造の店蔵・主屋、明治後期と大正 5 年(1916)建設の土蔵、昭和 7 年(1932)棟上の石蔵、昭和戦前期建設のモルタル蔵。敷地東側に店蔵・主屋・足袋蔵 3 棟が並ぶ蔵並みは圧巻で、時代による足袋蔵の変遷も理解できる。	
1 7	たびぐら 足袋蔵まちづくりミュー ジウム (栗代蔵)	未指定	明治 39 年(1906)建設の元栗原代八商店の土蔵造りの足袋蔵。現在はNPO運営の観光案内所兼まちづくり情報センターとなっている。	
1 8	かんきよ たびぐら Café閑居・足袋蔵ギャラ りー門・足袋蔵パン工房 ・クチキ建築設計事務所 ・土蔵	未指定	元奥貫忠吉商店の昭和 5 年(1930)棟上の住宅、明治 43 年(1910)棟上・大正 5 年(1916)棟上の洋小屋の土蔵 3 棟と建築年代不明の土蔵 (いずれも足袋蔵)。足袋蔵の 1 棟は市内唯一の 3 階建ての蔵である。住宅と足袋蔵 3 棟が様々な形で再活用されている。	
1 9	くさおぐら 草生蔵	未指定	明治 43 年(1910)建設と伝えられる元金楽足袋株式会社の石造の足袋蔵。建築年代に疑問はあるが、最初期の石造の足袋蔵の代表例である。	

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
20	イサミコーポレーション スクール工場・事務所・ 土蔵・モルタル蔵・木造倉庫	未指定	イサミコーポレーションの大正6年(1917)建設のノコギリ屋根の旧足袋工場、翌年建設の事務所、大正～昭和初期頃建設の工場(当初は講堂・寄宿舎・食堂)、土蔵(足袋蔵)、木造倉庫(足袋蔵)、昭和13年(1938)棟上のモルタル蔵(足袋蔵)。初期の大規模足袋工場の姿を伝える建物群。	
21	田代蔵	未指定	元田代鐘助商店の大正時代建設の住居と土蔵(足袋蔵)、昭和2年(1927)建設の店舗・主屋と土蔵(足袋蔵)の5棟が、短冊形の敷地に一列に並んで建てられている。	
22	旧忍町信用組合店舗	市指定建造物	大正11年(1922)建設の木造洋風銀行店舗。足袋商店主たちが出資して創業した地元金融機関の創業時の店舗で、足袋産業の発展を支えた。	
23	大澤家住宅旧文庫蔵	国登録建造物	行田の足袋産業発展に尽力した大澤商店の7代大澤専蔵が大正15年(1926)に竣工させた行田市唯一のレンガ造の足袋蔵。	
24	旧小川忠次郎商店店舗及び主屋	国登録建造物	足袋原料を扱った小川忠次郎商店が大正14年(1925)に棟上した土蔵造りの店舗併用住宅。現在はNPO運営の蕎麦店となっている。	
25	奥貫蔵(あんど)	未指定	奥貫忠吉商店が大正～昭和初期に建設した大型の土蔵造りの足袋蔵。現在は蕎麦店として再活用されている。	
26	行田窯	未指定	荒井八郎商店が昭和初期頃に建設した元足袋原料倉庫。曳家され、約1/3の大きさになって陶芸窯として再活用されている。現存する数少ない木造の足袋蔵として貴重である。	
27	鯨井家倉庫	未指定	昭和3年(1928)に建設された鉄筋コンクリート造の元足袋原料倉庫(足袋蔵)。現存する行田市唯一の戦前の鉄筋コンクリート造の足袋蔵である。	
28	イサミコーポレーション 足袋工場	未指定	昭和初期の建設と思われるノコギリ屋根の木造洋風足袋工場。足袋生産の拡大で、大規模工場が郊外に建てられていった昭和初期の行田を代表する足袋工場である。	
29	時田足袋蔵	未指定	元時田啓左衛門商店の昭和4年(1929)棟上の大型の土蔵造りの足袋蔵。足袋産業の発展とともに足袋蔵が大型化していったことがわかる。	
30	武蔵野銀行行田支店店舗	国登録建造物	足袋産業の資金面を支えた忍貯金銀行が昭和9年(1934)に竣工させた本格的銀行建築の店舗。戦後は足袋会館(足袋組合事務所)となり、現在は武蔵野銀行店舗である。	

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
3 1	旧荒井八郎商店事務所 兼住宅・大広間棟・洋館	国登録建造物	行田足袋被服工業組合の理事長を務めた荒井八郎が昭和 12 年(1937)に棟上した事務所兼住宅等 3 棟。「足袋御殿」とも呼ばれ、地域の迎賓館としての役割も果たした。現在は和牛懐石「彩々亭」の店舗となっている。	
3 2	藍染体験工房「牧禎舎」	未指定	昭和 15 年(1940)竣工の元牧禎商店の事務所兼住宅と足袋被服工場。現在は N P O 運営のアーティストシェア工房&藍染体験施設となっている。	
3 3	フライ	未指定	小麦粉を溶いてねぎを入れ、薄く延ばして焼き上げたお好み焼きに似た郷土料理。足袋工場に勤める女工さんのおやつとして普及した。	
3 4	ゼリーフライ	未指定	おからとジャガイモを混ぜて揚げたコロッケに似た郷土料理。足袋工場に勤める人々に、おやつとして愛されている。	
3 5	行田の奈良漬	未指定	足袋商店が得意先への贈答品として愛用している行田の奈良漬。足袋産業全盛期には、足袋商店の店先に漬物樽が持ち込まれ、そこで漬けて持ち出されていた。	
3 6	孝子蔵	未指定	大木末吉商店が昭和 26 年(1951)に棟上した石造の足袋蔵。木材不足から極力木材を使わずに建設されている。戦後の行田を代表する足袋蔵である。	
3 7	栗原家モルタル蔵	未指定	昭和 28 年(1953)に館林市の農家の米蔵を移築した元福力足袋有限会社のモルタル造の足袋蔵。数少ない戦後の移築転用された足袋蔵である。	
3 8	小沼蔵	未指定	昭和 29 年(1954)建設の元豊年足袋本舗の大谷石造の足袋蔵。戦後の行田の足袋蔵の代表例である。	
3 9	行田足袋	未指定	行田に本社を置く足袋商店が製造する足袋。地域ブランドとして多方面に発信している。	

構成文化財の写真一覧

① 埼玉古墳群



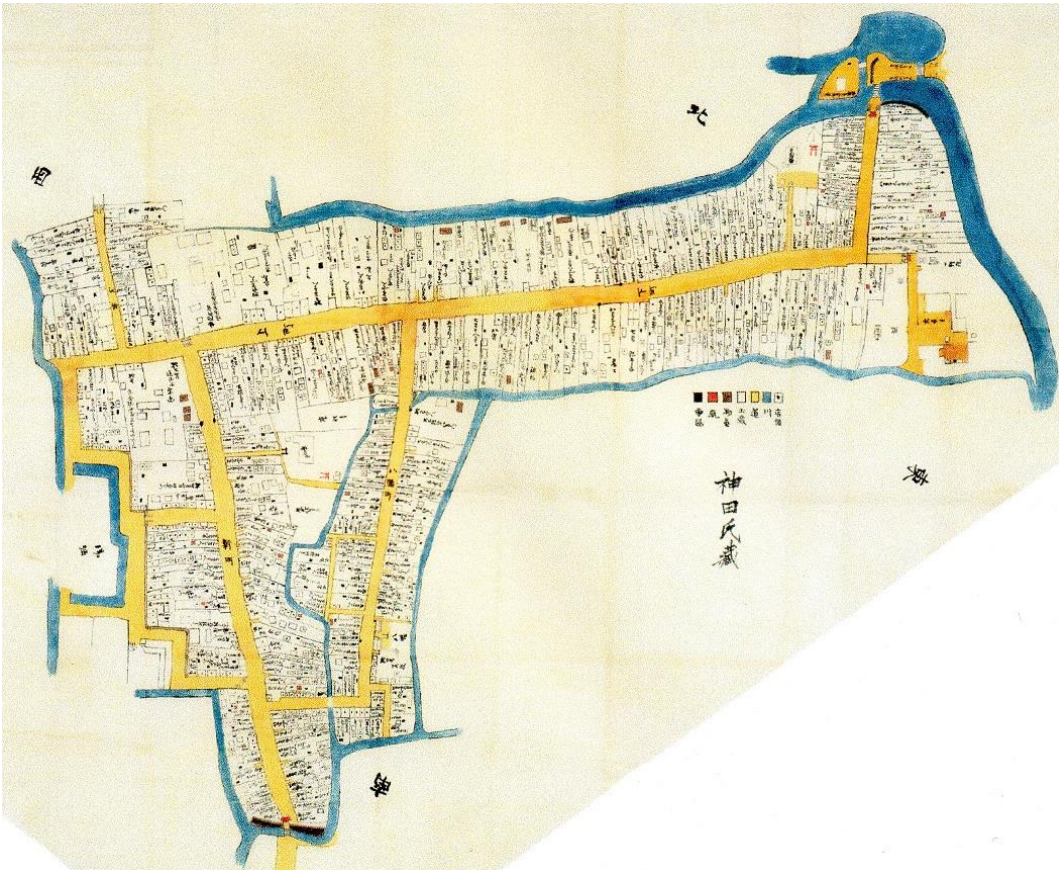
② 忍城跡



③ 石田堤

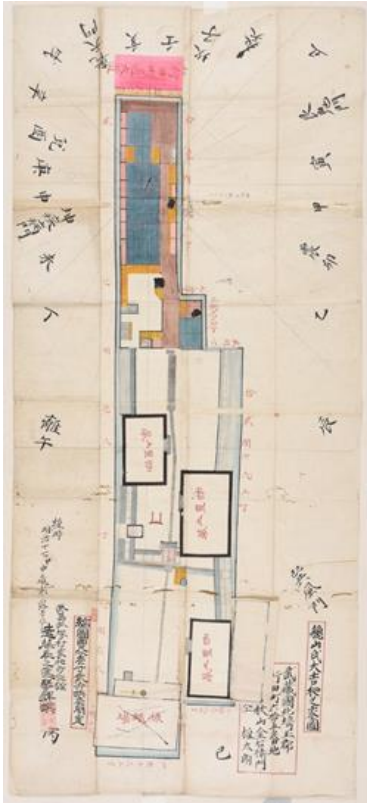


④ 享保年間行田町絵図



構成文化財の写真一覧

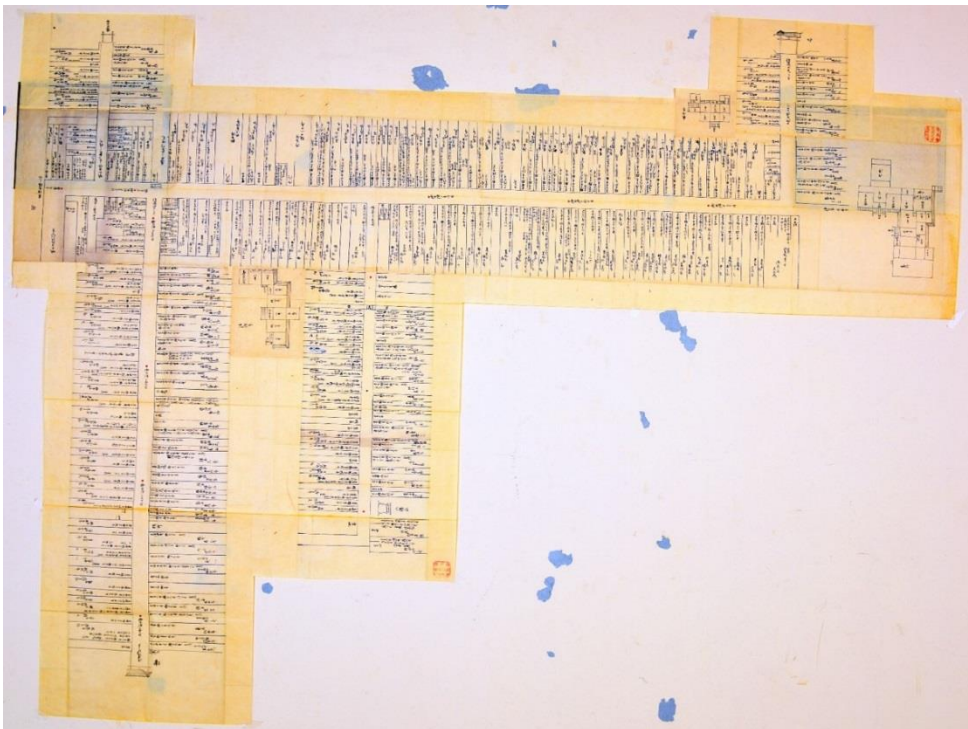
⑤ 秋山家文書



⑦ 大澤久右衛門家住宅・土蔵



⑥ 天保年間行田町絵図



構成文化財の写真一覧

⑧ 初午祭り



⑩ 森家土蔵・古蛙庵



⑪ 行田の足袋製造用具及び製品



⑨ 今津印刷所店蔵・主屋・土蔵



⑫ 高橋家の芭蕉句碑



構成文化財の写真一覧

⑬ 十万石ふくさや行田本店店舗



⑯ 保泉蔵



⑭ 牧野本店店蔵・主屋・土蔵・足袋とくらしの博物館



⑰ 足袋蔵まちづくりミュージアム(栗代蔵)



⑮ 時田家住宅・時田蔵



⑱ Café 閑居・足袋蔵ギャラリー門・足袋蔵パン工房・クチキ建築設計事務所・土蔵



構成文化財の写真一覧

⑱ 草生蔵



㉒ 旧忍町信用組合店舗



㉓ イサミコーポレーションスクール工場・事務所・土蔵・モルタル蔵・木造倉庫



㉔ 大澤家住宅旧文庫蔵



㉕ 田代蔵



㉖ 旧小川忠次郎商店店舗及び主屋



構成文化財の写真一覧

⑳ 奥貫蔵 (あんど)



㉑ イサミコーポレーション足袋工場



㉒ 行田窯



㉓ 時田足袋蔵



㉔ 鯨井家倉庫



㉕ 武蔵野銀行行田支店店舗



構成文化財の写真一覧

- ③① 旧荒井八郎商店事務所兼住宅・大広間
棟・洋館



- ③④ ゼリーフライ



- ③② 藍染体験工房「牧禎舎」



- ③⑤ 行田の奈良漬



- ③③ フライ



- ③⑥ 孝子蔵



構成文化財の写真一覧

③⑦ 栗原家モルタル蔵



③⑧ 小沼蔵



③⑨ 行田足袋

